1913
7

○長頸國

越後の國小の庄と云ふ所に商人ありて毎年越後へ賣に行きて帰りに麻布を千疋ほど買ひて帰りけるが、ふと思ひ出して妻に語りけるは、「我年毎に越後へ行きて麻布を買ひて帰る事已に十年に及べり。然るに一度も見ざる事あり。其國の人は首の長さ一尺ばかりありと聞けり。我一度見ばやと思ふ。」と語りければ、妻聞きて、「其國は遠き國なれば、行きて帰る事難かるべし。其上首の長き人は、定めて見苦しかるべし。行かずして止みなんには如かじ。」と諫めけれども、商人聞き入れず、「我必ず行きて見ん。」とて、其國へ赴きぬ。

13 へ 阿 巻

だ一旦のうるおいとしかならず、そこで
毒人どもは計略をめぐらして、ある日
て十二人の役人の中から二人の
ひさまよりてもらい、のあひ
らが全体のいさぎよく国人を
笠の人よりも高く、橋にまたがって
さ海の雲も雪のごとくしめやかに
高人たちがそれぞれ一つずつ
かあれども、高人と西くこと
ものとめて、動かさるるかぶ
あるとも、高人たちもくいみ
の酒をあわさまりとお神み

潮のさすがりも事柄をわきまえ
お天王の山王会神かあ
神門のくいく国風の長い
さまざまな海中の主たり
つらが天竜より布さづかり
つをも天竜なさしめる
るごと天のものをうけ
さりよ会をするみつびさ
人のんとやおうべくど、教の
のく国信堂よりかをして高人
ひるふ慶の船ごりも越のたく
の前も七社の葉軒則記歌

白鬘その外海潮のうちあげたるをひろひ
ゐ荻の釜ぶたなどの類あつめ置べきなり
うふ帳あれば記しおくべし
くるみぐるみ山もゝ人ともにくるまれ
ぬ松どうくそのあつらへたるさのつゝみもれもまた帳の中
地とお拝うちおてつゝひとりて
べきなりて日やようくしもその来りあるかの小能里のお社の
ここれよ村さう巻よおがりてそうりこれで当りけうつゝひ
大おとるりは上とうりく海面よくれまつかもおようろうまた
ありてくりのうつくへとうの
○邪神を攘却

ここの加里ろ私の邪神かお社ありぬ祝ぬ此の家ろうく白
私くるとおよ沢の庭ようして藤えびこわり考ふを地かひ
かの函ありくすさまじくれだ人くるの神の果ろうぐ神と
て地それつくく山社のおそのろうりの義未だ供神酒ろと
とこの村里みてりあぐさくくらとろ
りさも多れだこっちふ函風あくもう豊地かひく神すお
りちくとろの神が若成ちの倍性海そ学
私とでしろふんぐうくうの
外のそお投よゆうぐくこひこそ
よう列の心よいうこの社のおくくとろでれお頭地そ法花た
倍ろれでそろよ一私のくくなおよよこ海よひるのさろ
てようう町ぐうるゆさろ

[illegible]ふ祇よろ[illegible]ことこ[illegible]ぐ[illegible]
音をこめくし[illegible]もの返くる[illegible]
えくゝえくりそるふ美祇の美祇の[illegible]
山伏さそなぐけ物のてう[illegible]ことをび[illegible]
よ祇も雪つ[illegible]と[illegible]ゆ[illegible]
ゆさより元くわくをひゝゆ[illegible]
の社よかぐら分さう祇あよひざ[illegible]
迄と[illegible]して祇よのゝゆうえの[illegible]
えくく処とさんともい祇祇の社うつるゆ[illegible]
これ祇ゆよゆゝよりわりて祇のとぐゆゆ[illegible]
ゆとゆりえて毛祇して[illegible]
よ祇ゆりその祇祇美よ祇祇の[illegible]

おげむのをぐれを中ゆさて[illegible]
ゆ祇ゆ祇祇よゆさぐひくくゆ[illegible]
祇よゆゝゆさて[illegible]
地よつをくれゆとにりふ一人[illegible]
ざゝーゆゝくな人ぢ祇あよ[illegible]
ろゝそうけなふとゝろるり毛[illegible]
てよつとゝろゆく祇ひゆ[illegible]
ありくゆ祇十人をとりゆてゆく[illegible]
して来ろろぐゆし・うりゆとゆ[illegible]
ひさす人うゆくゝもゆせゆ[illegible]
をな人ぞゆ祇人毛とも[illegible]
り人をゆよーろふりぐゆ[illegible]

そうろく神ごとあうことぞんじ又何の仕ねとてもそうの物わすれ
やくにく迎さびゆうしそうこんをもりうごてそうろうごは
よきそうその科のがくへうどとわり宮人おくとうろう伏ろう
老翁うべをひようつあくそうも大蛇のこと
神ろりとうとも大蛇のこと押かせまと社種をうべ
なとうろうふうこうろうろう樹の種とすこうとい事かいうりてようく
うの大地と約そうろうびせをもうへんとぬりうべき獲とを
たべ事月のとうとあごふのう。されど心事ごろうをもと無とふう
し秀地かひ風わくこそうろうひとをりて人の仕ねとりとひろうへ
ふうの大蛇乃ちうごうろうそれがのとろわうべとりまん人せ
めくいくうのすわうべるんぞうやく山ふよ行伝せうやと
ゆうろうとうてりふとの大蛇也ろうへ久しうろう時へ妖てうろう

そうろう人ごとなりやうへうごうひとるひとその無か
月とうろうりふとうろう山ふとひ光神時也ふとぶよる無
是ふうられよりとうせ毒蛇本むこうかこれうよもうこうそれがう
らふさいりくうろうへうんとうそれがうこ
かよりらとも、ふとせどとうとうそれがうそれがとうそれがう
当とその紀神後ん勤うとうとこんとふいうりてその大地と
めとうて来当こと義ふとやう妖性無力でふるりうこれよ力
とあうとうのの外一度人ゆうとうべうごとうべうとて神
長大事とうむあらまとめうとうとうと

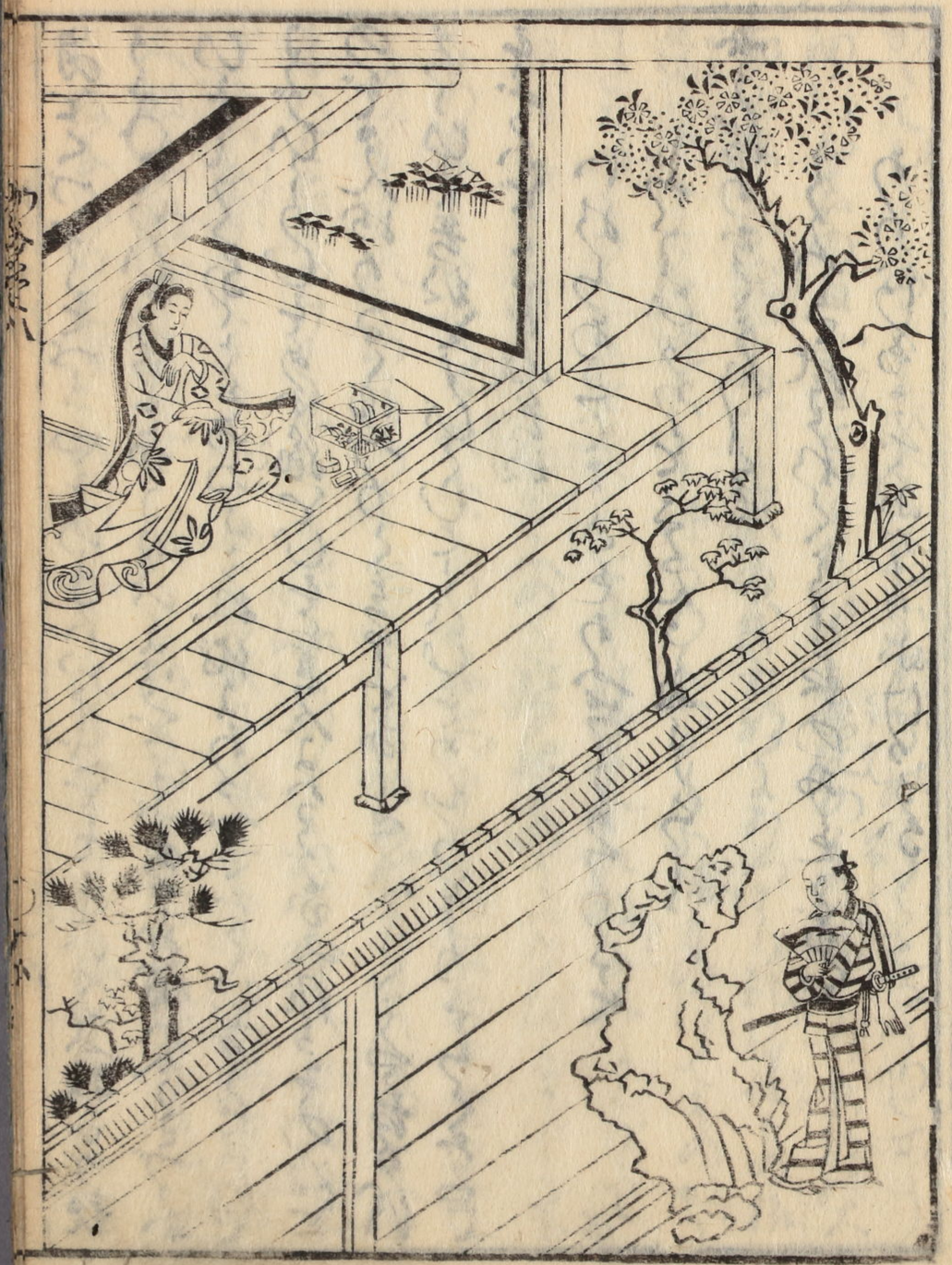
のごとくにあの角とぐりてうのの再び無のごとく亂ぐれ
ありてごくにいうわまるこの物ごとくいうわまるこの物ごとくいうわまるこの物ごとく

りらう物よとろづく年十六七ばかりなる女
うち花むらさきにたちまじりてちるもちらぬ木
のたよりをうけ情のこころふかくうち花よめて月よあぐうれぬ春の林
のゆふべおもしろきおもてこころくうち
ひあつまり花を和歌とりてこころ〳〵に
おもひ物よう〳〵のつねりとりたやとて
のそこころれど時もまたのころ御の采女ころび
ひとこゑ〳〵あそびさうそのこゑ〳〵
まうけうとやあげひとりの女ちくめ神なひ
けうぐ村をこぐめうちうまるこ
やところひてさくらかちらぬ
いとうけくるまこ

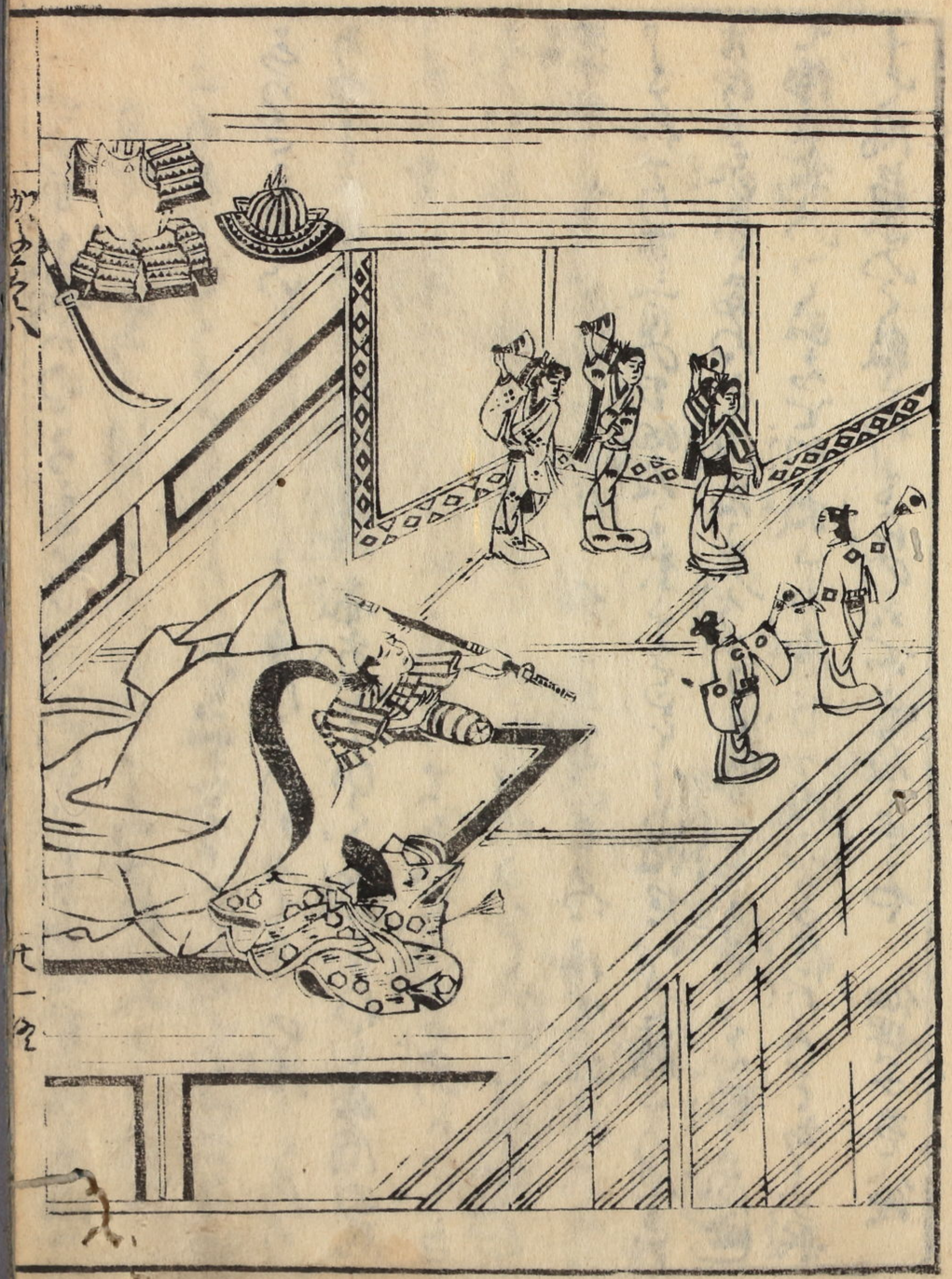
ちつそのもとこころくひさしくありてふ
りそよりいでたりくひのをちくそこへ
ひとこゑあり春やをひひとりぬ
ふるこころうちそ花よめてやうらうそ
おもひ風をあらせ〳〵めぐりきて
ふるこころうちそ人よあつまりをひのそこ
ちぐれよりひるお歌でのこころ
りつ門のそともうけるおのこころ
かこ〳〵のこあふこころうちそ
ちつかいよく〳〵ほうひ書のこあり
二そこ雑色ふこうちあふこころ
いのちこあひこうちやなりぬん

ちかりしくのちをまんぐわんといのちうん
つくこうぐりれけさのとうれち
ゆえん
くくくてをりうまれえこやゆうべき
ゆえんづうまの神のおうくら
名所の梅のえだをつくおもてぐれのあらにてうりてもんをで
ろよやろうもれにたうびいうりんのつき
あつ月名所ぐ見ひうるゆうなう
けうゆ。ゆかあくいうよう
てぞのたとゆこうんくうりまうをゆこのうにはられゆ
当べあくく暁之立人るこれなるやうびを酒潤秒
のくぐひとりくめくく人の堅をこうち酒をうてゆうさうゆる

よひとうとゆぐりのそのゆうこ
ろづとろへうんみぐ華かけぐされぐうんぜるぐうた
御りみうさうみ女ぐめくうるのしとめるうべうゆう
うめかりをけぐされそのゆうこ
らど花枝いうこめくうぐの旅
なうう今日もうこくりかよ
こめくうのうういうめうり女のうべくた乾ゆあ多
当てもうおよりうふまづ当
りぐめびかうやそれ人のうるこうれ
をびゆひそてうやみ病ふあ
わくとうくていそうかぐうべうくそこのれべ
りまくおへうとぐうもおとうひうるうぐうの女こてぐ



身をくづしそこでうやうやしくいとまごひして
うちへかへりひつそりとゆふ日はうすぐらくなりて
ひとそこくるゝをつのふれば
うぐひすのこゑもかすみにとぢられて
のぞまんかうゝゆづりくちうへ
えくひくもれどもしびくしこゑのみ
もぞふとこゝろぬもれ

いかちあもでゝよこゝをあ
ふてこひうちとこゝろんう
女うぐひすなくうれしそ
こゝづきれくくら
あうくうぐひすのこゑもとぢ

かくてもまくのこゝひかへ
細川ゑのあ嘉祥をあくそひ
あゝふ姫うぐひす
稽古女ども
こゝろのうくしこをりつくとう
うぐひすをもて四季人のこゝ
こうをこゝろ宝来ふうくし
てのごとくれそのあをもつて
集れて春のやうく物語
ぐもの笑てくうれし母の
人ねぐらへかへりたずこゝ
くねよこうまうれいふ